# 1930年代世界の文学

永原　誠 編

立命館大学人文科学
研究所研究叢書　5

有　斐　閣

## 執筆者紹介（掲載順）


永原　誠　立命館大学文学部教授
久津木俊樹　立命館大学文学部教授
川上　勉　立命館大学法学部教授
辻　善夫　立命館大学法学部教授
長橋芙美子　大阪市立大学文学部教授
奥村剋三　立命館大学経済学部教授
寛　文夫　立命館大学文学部教授
風呂本武敏　神戸大学教養部教授
古我正和　滋賀医科大学医学部助教授
中村泰行　立命館大学理工学部助教授
広瀬英一　大谷大学文学部教授
田中　礼　京都大学教養部助教授
小野理子　神戸大学教養部教授
岡田英樹　立命館大学文学部助教授



1930年代世界の文学

立命館大学人文科学研究所研究叢書　5

昭和57年9月20日　初版第1刷印刷
昭和57年9月30日　初版第1刷発行

定価 5,200円

編　者　永原　誠

発行者　江草忠允

東京都千代田区神田神保町2～17

発行所　株式会社　有斐閣

電話 東京 (264) 1311 (大代表)
郵便番号〔101〕振替口座東京 6-370番
本郷支店〔113〕文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕左京区田中門前町44

印刷・中村印刷株式会社　製本・新日本製本株式会社



© 1982, 永原　誠.　Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします.



ISBN 4-641-07468-2



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 研究叢書刊行のことば

社会諸現象は，複雑多岐にわたっているばかりでなく，相互に深く絡み合っている。だから，社会諸現象とその本質および運動法則を解明しようとするとき，あれやこれやの一面からではなく，相互連関的，綜合的な研究が要求される。当研究所は，創立以来，このような観点から，専任教員を軸とし，広く学外からも研究者の参加をえて，いくつかの共同研究を進めてきた。今日，テーマ別による共同研究会は13を数え，参加者は延べ300人に及ぶほどになっている。これらの研究会はすべて学際的な形で進められている。それらの研究成果は，これまで，雑誌『人文科学研究所紀要』として発表されてきた。だが，『紀要』では，各論文の枚数も執筆者もかぎられるため，研究成果を充分に生かすことはできなかった。

当研究所では，研究を広く社会に伝達するために，その活動の一環として，土曜講座を開設してきた。その土曜講座は，本年で30周年を迎える。この土曜講座30周年を記念し，共同研究の成果およびその共同研究の過程でものされた個人の業績を，立命館大学人文科学研究所研究叢書として刊行することにした。

この研究叢書が，わが国の社会諸科学や人文諸科学の発展，ひいては日本の民主主義の前進に寄与することがあれば，当研究所としてこれにすぎるよろこびはない。

1976年6月

立命館大学人文科学研究所

# はしがき

本書は，立命館大学人文科学研究所の所属グループとして1973年に発足した30年代文学研究会が，以後およそ7年，主として月例会での報告と討論によってすすめた共同研究を，研究所の慫慂によってひとまず論集としてまとめたものである。われわれの共同研究の動機となったのは，70年代の国内外情勢の激動，わけても世界経済の異様な暗転や核軍拡動向の深刻化に触発された，1930年代の世界とその文学への新たな関心であった。大恐慌の到来がファシズムと軍国主義の成長に，やがては2度目の世界戦争にと帰結してゆく10年期を振返って，当時の作家たちが危機の下で選んだ文学の在りようや作品のなかに作り出したものを見直してみることは，歴史をくり返すことが許されない今日にあって，ひとつの意義ある試みであろうとわれわれには思えた。また，例外なくすべての国々をとらえた30年代の危機のひろがりを考えるとき，諸国の文学を横につないで考察に上すという構想の目新しさも，われわれの興味をつよく引くことになった。研究会には，イギリス・ドイツ・フランス・アメリカ・ソビエトおよび中国にまたがる6カ国の文学の研究者が，一時的会員も含め，あわせて17名参加し，月例会は37回を数えている。

本書には2部立ての構成を採用した。そのうち，論集の本体をなす各論部は，上記6つの国ごとに1ないし2編に数を限った作家＝作品研究を収め，個々の小説家，詩人，さらには劇作家による時代の体験・省察・表現に即して，30年代期の今日的意味や教訓を具体的に探ろうとするものである。作家と作品の選択は，おおむね執筆者ひとりひとりの興味と希望にもとづいており，30年代世界の文学の例示であって，およそそれぞれの国を代表させる含みをもつものではない。

各論に先立てて巻頭に置いた概観部は，6カ国それぞれについて30年代期の情勢一般と文学動向を鳥瞰し，文学史的一時期としての特徴や問題点にも

触れながら，各論のための簡略な手引き役をつとめるものである。6カ国以外の諸国，とりわけわが国の文学について専門的研究者の参加を得損じたことから，共同研究は大きな制約を蒙った。この不備を補うため，1978年に特に江頭肇氏を例会に招いて，日本文学の30年代期について報告を乞い，多大の教示を得ることができた。事情により本書への書下し寄稿が叶わなかったので，例会における氏の報告をわれわれの手で要約し，概観部の末尾に添えさせていただいた。

なお，巻末には別に30年代世界文学年表，ならびに本書に言及のある30年代期作家の人名索引を付し，読者の便に供した。

本書の編纂と上梓には，年譜作成の煩瑣な作業をお願いした戸田昌基氏はじめ，人文科学研究所の職員諸氏から，並ならぬ尽力をいただいた。はしがきの結びを借りて，深く謝意を表したい。

1982年9月

30年代文学研究会

永　原　　誠

# 目　　次

はしがき

## 概観部

1930年代世界の文学……永原　誠……1

イギリス文学……久津木俊樹……6

フランス文学……川上　勉……17

ドイツ文学……辻　善夫／長橋芙美子……33

アメリカ文学……永原　誠……46

ソビエト文学……奥村　剋三……61

中国文学……筧　文夫……72

日本文学……江頭　肇……85

## 各論部

オーデンの転向あるいは後退をめぐって……風呂本武敏……95

オーウエルと30年代……古我　正和……110

『アントワーヌ・ブロワイエ』あるいは
認識の手段としての文学 ……川 上 勉…124

マルローとアラゴン……中村 泰行…143
——30年代の作品を中心として——

ブレヒト『第三帝国の恐怖と貧困』……辻 善 夫…166

プロレタリア作家にとっての1930年代……長橋 芙美子…184
——ハンス・マルヒヴィッツァの場合——

ジョン・ドス・パソス……広瀬 英一…199
——『U・S・A』をめぐって——

リチャード・ライト……田中 礼…212

生きた人間の描出……奥村 剋三…229
——小説『第2の日』の場合——

ミハイル・コリツォフとスペイン戦争……小野 理子…243

『満洲』が生み出した文学 ……岡田 英樹…215

**1930年代世界文学年表**……287

# 概　観　部

## 1930年代世界の文学

1930年代の文学を概観するには，ひとまず国別に叙述する方法を採用するほかない。文学をとりまく時代・社会の動向も，文学そのものの展開の様相も，国により当然ながらいろいろと特異なところがあり，またそこが諸国の文学を通観する面白さでもあって，おしなべてひとつに括ることをにわかに許さないからである。以下，英・独・仏の西欧3国，アメリカ，ソビエト，中国，日本の順で，それぞれの文学における30年代期を，大づかみに眺めてゆくことにしたい。

しかし30年代文学はまた，第1次大戦後の現代世界に訪れた最初の歴史の激動を分かちあったという一点で，国境を越えてひとつにつながっている文学である。あるアメリカの文学批評家は，30年代期がまさに閉じようとする時期に，「1929年10月24日，暗黒の木曜日にはじまり，1939年9月1日早朝，ドイツ軍団のポーランド進撃によって終りを告げた10年期」としてこれを振返り，「文学的出来事が，社会的出来事の飛びゆく裳裾をかくも近接して追った時期はかつてなかった」と述懐している[1)]。世界恐慌の付け火となったウォール街株式市場の崩壊と，ヨーロッパにおける2度目の世界戦争の戦端と，ふたつの大異変にはさまれた10年期，――ここには，現代資本主義の諸矛盾が真に汎世界的な規模において爆発的に顕在化した，危機の一時期としての30年代期の特徴がよく見てとれるようである。この危機の端緒をつくった世界経済の破綻は，多くの人々のくらしと人生をこわし，国々の社会生活を根底からゆさぶるとともに，危機打開の方途をめぐって階級間・国家間の対立

を尖鋭化させ，未曾有の社会的・政治的激動をいたるところに招来することになった。西欧諸国とアメリカでは，政治権力の性格と帰属をめぐるはげしい抗争が，ファシズム国家，人民戦線政府，ニューディール路線など，これまでの歴史が知らなかった政治の諸形態を現出させる。日本は軍国主義と戦争の道に深く足を踏み入れ，日本の軍事侵略に直面した中国では，国内諸勢力の再編成が民族の存亡を賭けてめまぐるしく進行してゆく。経済恐慌の外に立つことができたソビエトも，激動的状況の例外ではない。一国社会主義経済建設や国際ファシズムとの闘争など，複雑な課題をめぐる孤立的環境のなかでの取組みは，スターリン独裁現象の発生と絡まりあいながら，社会と政治に極度の緊張をもたらしつづけている。

このような危機と激動の時代的文脈を抜きにして，30年代期の文学に近寄ることはむつかしい。「社会的出来事の飛びゆく裳裾」のすぐうしろに文学が身を置いているのは，アメリカだけに限ったことではないのである。たとえばドイツの場合，後に詳説されているように，ファシズムの政権掌握につづいて，「ひとつの文学とその読者の亡命」と呼ばれるほどの異様な事態にまで立到っている。国々の文学をひろくひとつの流れとしてとらえようとした異色の文学史家A．ゲラールは，「30年代に起ったこと」を，「文学者の政治への接近というより，文学者のところまで政治が迫ってきた」状況，と表現する。[2)] 作家たちを例外なくとらえこんでいったこの期の社会と政治の作用のはげしさを，よく言い当てているといえよう。

以下の概観でも，国ごとの叙述を一貫する共通の視角は，ゲラールのいう「政治が迫ってきた」なかでの文学の反応と動きを，ひとわたり見届けることに置かれている。状況にたいして作家たちが選んだ態度や在りようはさまざまであって，政治への拒絶反応をかえってつよめる傾向も認められれば，逆にファシズムにすすんで同調してゆく作家も見つかる。30年代期の文学は一面で，時代の危機と激動の試練にさらされてするどく分岐し，多様化の様相を帯びていった文学である。「10もの潮流に分類」できるとされるフランス文学は，この点でのひとつの典型例といえよう。しかしいま一面で，どこの国であれごくひろい幅をなす作家たちの間に，ひとつのまとまった傾向が顕著となり，おのずとこの期を代表する太い流れをつくっているのを見落す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ことはできない。この30年代文学の主潮をもっとも深いところで特徴づけているのは，約言するなら文学の社会的・人間的責任と使命の意識ということができようか。失業やくらしの窮乏，ファシズムによる迫害，戦争の不安など，大小の脅威が無数の人々にふりかかり，しばしば作家自身にも及んでくるような状況のなかにあって，多くの作家たちは世代や流派の別を問わず，人間の幸福のために人間を描くという文学の根本に立戻ることを，否応なくうながされたように見える。彼らは度合いや流儀の差こそあれ，人間に苦痛と悲惨を強いている未曾有の危機や，危機をもたらした社会と政治に一様に眼を向け，時代の大きな動きに参加してゆくところにそれぞれの作家としての在りようを求めてゆく。

30年代期のこうした特徴的な潮流に着目して，現代の人間的・社会的現実への自覚的関与に文学を見出そうとした作家精神を，その種々のあらわれと働きにおいて一望することが，以下，概観の基調となった。

ドイツ文学では，第3帝国期の破局的な状況の下，もっとも深刻な形で文学に亀裂と分化が生じるなかにあって，大量亡命を強いられた側の作家たちの間に，「これまでは孤独のうちに時代の対決から眼をそらせていた」人々を含めて，「たたかうヒューマニズムの戦線」に立とうとする志向がひろく形成されてゆく，その成行きの必然性に概観の関心が集まる。

作家主体の変化は，作品における新しい傾向や特色となってあらわれてくる。イギリス文学の概観は，オーデンとそのグループに焦点を据え，彼らの詩作における「詩が社会に向って目を開く可能性」の追求に，30年代期を代表する文学の姿を読みとるものである。アメリカをはじめとして，その他の国々では，重点を小説に置きながら，危機の体験の切実さに根ざす生活記録・時代記録の文学性，人間を見る社会的階級的観点，歴史そのものを描こうとする「集団小説」「大河小説」など，この期が作品の主題，人物像，形式，方法にわたって新たにもたらしたものについて，簡略ながら分析や指摘がおこなわれている。

ドイツ，ソビエト，中国では，一種激烈な論争の時代のおもむきを呈した文壇・評壇の状況が注目を呼んでいる。論争は，文学と科学，文学と政治，作家の世界観の位置，文学の階級性・傾向性・党派性といった，文学の本質

と社会的役割にかかわる諸問題，リアリズム論や中国における「文芸大衆化論争」など創作方法上の問題，さらには文学者たちの組織化・集団化に関する運動論上の問題というように，多岐な領域におよぶ数多くの論点をめぐって，活発にくりひろげられている。作家たちの社会的政治的意識がつよまるなかで，文学そのものの見方や理論も，立入った見直しを迫られたのである。日本で，プロレタリア文学陣営による「人生全般の考察」をめざす文学の提起が，強烈な衝撃を当時の文壇全体におよぼしたといわれていることにも，そうしたこの時期の趨勢がよくうかがいとれる。

文学の責任と使命の意識はまた，フランス文学の紹介するロマン・ローランとバルビュスの精力的な反戦活動，スペイン市民戦争に身を投じた諸国の反ファシズム文学者たち，さらにはすべての国に起っている作家の連帯と集団化，文学の運動化の気運など，時代現実に直接働きかけてゆこうとする作家たちの行動意欲のたかまりとなって現われている。それらの活動がしばしば国際的規模と性格を備えたものとなっているのも，危機が世界をひとつに変えた30年代期を特徴的に反映するものであろう。

30年代世界の文学は，こうしてその主潮において，時代の社会と政治にひたむきに挑もうとした作家たちによる多彩な試行と達成の記録ということができよう。この記録には，少なからぬ数の錯誤や挫折の経験も見つかるようである。イギリスやアメリカでは，この期を主導した作家の多くが，中途で政治的転向をとげ，あるいは社会的なものから遠ざかってゆく。日本の「人生全般の考察」にすすもうとした文学潮流は，芽生えの時期に権力の強圧によって潰え去る。ソビエトでも，人間と時代をいきいきと描く作家の気風は「30年代後半の時代の暗流」に抗し得ないまま，誤った政治に屈服することになる。しかしこれらの失敗や敗北まで教訓として含めて，30年代文学の今日にもつながる意義は，すぐれてその時代参加の個性に見出し得るものであろう。当時と同質の危機が，再度の爆発の危険をはらんで今なお歴史の基底に動きつづけている限り，作家がそうした歴史とどうかかわるか，社会と政治をどう作品にとらえるかということは，現代文学の課題として，その切実性を減じるものではないだろう。

30年代文学の以上の見方と理解に立って，その諸経験や意義をよりつまび

らかに解明することは，個別的作家・作品研究に属することとして，のちの各論部に委ねた。概観部の狙いは，そのまえおきとして，この期作家・作品への基本的視角を整理すること，および全体の鳥瞰図をあたえることに置かれている。限られた紙面の下での種々の不備と遺漏は，各論によって補完されることを期待したい。

なお概観部は，30年代文学の今日における受容の状況にも国ごとに目を向けることにつとめた。アメリカ，ソビエト，中国など，多くの国に認められるのは，一言にいって研究の出発のおくれや評価の揺れとためらいであり，しかもそこにはそれぞれの国の政治の状況が，深くからんでいるように見える。30年代文学の政治指向の個性を側面的に証言する現象として興味深いが，同時にどの国でも，研究と再評価の努力が着実にはじまっているのを見ることができる。30年代期の文学は，やはり今日の世界にとって黙過できない存在なのである。

1) Malcolm Cowley, "A Farewell to the 1930's" (orig. pub., Nov. 1939), Think Back on Us: A Contemporary Chronicle of the 1930's, Southern Illinois U. P., Carbondale and Edwardsville, 1967, p. 347.

2) アルベール・ゲラール『世界文学序説』(中野好夫訳) 筑摩書房，世界文学体系，1961, p. 274.

(永　原　　誠)

# イギリス文学

30年代のイギリス文学について語ろうとする時，オーデンの名を欠かすことはできない。というのも，知識層出身の作家がいかに政治にかかわりうるかといった問題に，オーデンやその友人たちは，作家生活の当初から直面したからであった。

オーデンが学生のころ，友人スペンダーに自らの詩論を次のように語ったという。

> 詩人とはいわば化学者のようなもので，自分の感情から離れて，単語を混ぜ合わせて詩を作るのだ。[1)]

このことばは，後になって詩の形式への関心を深めてゆくオーデンの出発点を示すものとして興味深い。またこれはエリオットの「詩は……情緒からの逃避である[2)]」ということばを受けついでいることは明らかである。詩は感情の発露ではなく単語を意識的に組み立てることによってできるものであるという意識的創作方法をオーデンはエリオットから学んだといえよう。オーデンの友人マクニースは自らの世代にとってエリオットの持っていた意味を次のようにいう。

> エリオットに認められるのは，世界観を持った詩人，人間の研究に関心を持つ詩人である。彼の世界観は敗北的であり，衒学者の眼鏡を通して人間を眺めている。とはいえ彼は少くとも文明的であり概括的にとらえている。衒学的であることを考慮に入れても——彼はリアリストであった。[3)]

エリオットの初期の作品が「身のまわりの人々を描写しているが，その人々の背景にある現代世界を見るものでもある[4)]」ことをとらえてマクニースは彼をリアリストとしたのであった。このように30年代の詩人たちは創作方法だけでなく，詩が社会に向って目を開く可能性をもエリオットから学んだの

である。

当時のイギリス社会を特徴づけたものはとりわけ不況と失業であった。20年代を通して失業率はほぼ10%であったが1930年には16%，31年には21%となり，30年代前半は15%を下まわることはなかった。こうした状況がファシズムをも育てた。イギリスではファシズムに対する大衆的な反撃が効を奏したが，その抬頭を30年代作家のいく人かはドイツで見聞することになる。20年代末から30年代初めにかけてオーデンとその友人たちはドイツを訪れている。イシャウッドの『ノリス氏は乗り換える』，『ベルリンよさらば』はドイツを舞台にした小説である。スペンダーの詩『ウイーン』はオーストリアの労働者のファシストとの闘いを描いているし『燃えるサボテン』の中にもドイツを描く短編がある。

スペンダーはドイツである青年と知り合いになり，その青年に金をだまし盗られたことがあった。そのことについて自伝の中でこう語っている。

> より幸運な社会階級の一員として私は彼に負い目を感じていた。もし彼が盗んだにしても私はこう感じたことだろう，私が社会から与えられた利益を彼がいくら盗んでも十分ではないのだと。[5)]

社会の不正義に対して彼は負い目を感じていたというのである。こうした反応のしかたは他の人々にも認められる。スペンダーやイシャウッドにとって若いころの文学上の指導者であったのはアプワードである。彼は30年代に共産党に入り文学作品の発表を中断している。この間の事情を描く自伝風の小説『30年代において』を1962年に発表した。主人公の青年教師アラン・セブリルは，生きる望みを失いかけた時，共産党に近づかねばならぬと考え自らに問いかける。

> ブルジョワのはぐれ者の僕，恵まれていながらひ弱で，高価な教育を受け，分を越えた便宜を与えられているのに惨めな敗北者になってしまった僕，こんな僕が，悲惨で厳しい条件の中に生れても屈することなく，自らの階級全体のために，搾取者に反抗して反撃している人々に近づきになりたいなどと厚かましいことがいえるだろうか。[6)]

オーウェルがビルマでの体験を小説にしたのが『ビルマ時代』である。主人公フローリは白人のクラブにおいて，インド人である友人が非難されてい

るのを聞いた時，その友人を弁護できなかった。そのことを思い出して彼は考える。

「犬，骨抜きの犬」とフローリは自分のことを考えていた……「……クラブのあほうども。あののろま共より自分の方が上だと思って満足していたが――やつらの方がお前よりましだ。みんなあほうだがともかくやつらは男だ。卑怯者ではない，嘘つきではない。死にかけて腐ってはいない。それなのにお前ときたら――」[7]

他の白人たちが臆面もなく植民地支配者として行動している中にあって，フローリは彼らを内心批判しながらも行動できない。このことについて彼は自らを責めている。

## オーデンたちの登場

新しい作家たちの登場を人々に印象づけたのは30年代初めの二つの選集であった。

詩人が自らの時代と共に進むのでなければ，注意深い批評家に喜びを与えることはできない……[8]

『新署名』の編者マイケル・ロバーツはその序文の中でこのように書いている。『新しい国』も同じ編者の手になるが，これには，よりはっきりと社会への関心が見られる。

イギリスにまだ残っている価値ある物を守りたいと思う人々は，革命のみが自らの価値基準を救い得るのだということを知るべき時である。貧者に感傷的憐みを持つ段階は過ぎた。我々は……政治から身を引いていることはできない。[9]

こうして登場する詩人たちは個別の特性を持ちつつもやはり共通の点も持っていた。それは社会の動きをとらえるイメジに見られる。オーデンは洪水のイメジを用いて社会的危機をあらわしている。

間もなく，すぐに，我らの満足の堤を
破壊的洪水が力ずくで突き破るであろう
　そして木よりも高く
突然の死を我らの目につきつけるであろう。[10]

デイ・ルイスも洪水のイメジを用いている。

堤は壊れた

……

遊んでいる時ではない
槌はふり上げられ鎌は
研がれている……[11)]

マクニースはスペイン内戦さなかのバルセロナを訪れてつぎのように書いている。

私がその町に着いた時は暗かった，
街にはあかりはなく，ただ250万の人口は，
水にとりまかれて箱船の中の動物のように
押し込められうごめいていた。[12)]

ファシストのひきおこした内戦をノアの洪水にたとえるのは，たとえとして正確ではないというそしりは免れまい。このように洪水のイメジがどこまで30年代の特徴をとらえていたかには疑問が残る。とはいえ，少くとも社会をとらえようとした詩人たちの努力を軽視してはならない。

### 小雑誌の役割

さきの選集に登場する人々を主要な寄稿者とする小雑誌があらわれる。たとえば『ニュー・バース』，『レフト・レビュー』，『ニュー・ライティング』である。これらの間には寄稿者の違いもあり，意見の相違もあるが，作家たちの中に反ファシズム統一戦線の気分を作り上げるものであったとはいえよう。

反ファシズムに多くの人々を結集したのは1936年創設の左翼図書クラブであった。その図書選定委員ラスキ，ストレイチ，ゴランツの中で共産党色の強かったのはストレイチのみである。このことからもこのクラブの幅の広さがうかがえる。スペンダーの『自由主義からの前進』，オーデン序文の『自由の詩集』，モートンの『イングランド人民の歴史』などが，この会のルートに乗って普及された。

また，デイ・ルイス編の『鎖につながれた精神』という論集も知識人たちが反ファシズムに結集したもう一つのあらわれである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com